

大田区サッカー協会少年部
チーム代表者 各位

大田区選抜「東京ベイスーパーカップ悲願の初優勝」大会レポート

2021年12月に「東京ベイスーパーカップ」が行われた。大田区選抜は、悲願の初優勝となりました。また、夏冬連覇は2001年度の目黒区選抜以来、至上2チーム目の快挙となります。(夏は若葉台カップを優勝)。大会の様子をレポートします。



(1) 大会概要について

東京ベイスーパーカップは、アクアラインの開通と共に、東京湾岸地域のスポーツ文化の発展、地域交流、そして少年少女の技術向上を目的に開催されている選抜大会である。

コロナ禍の影響により、今回は3年ぶりの開催である。参加は関東圏より48チームが参加した。

(2) 大田区選抜の選考方法について

選抜は「強化トレーニング」より選考している。強化は、1月の全体セレクションで決定した。つまり、今冬に全体セレクションは行っていない。また、強化と同時に「育成トレーニング」を開催している。そして、育成には選抜への推薦枠を別途設けている。ようするに、育成から強化(選抜)へ昇格するチャンスを常に設けているのである。安藤(大田クラブ)は、「優勝は、これまでの育成と強化の成果である」としている。したがって、選手を育成するシステムは効果的であると言える。

大会結果	
優勝	大田区選抜
準優勝	新座片山
第3位	木更津選抜
第4位	船橋トレセン

また、7月より第8ブロックトレセンの選手も強化に招集した。なぜなら、例年トーマスカップ(東京都のブロックトレセンの選抜大会)は7月上旬に行われる。したがって、7月より第8ブロックトレセン所属の選手も強化に招集している。

そして、本大会の前は「第2回大田区選抜大会」を主催した。選抜の強化を目的とした区選抜による交流大会である。大田区は、AとBの2チームが出場した。



最終的には本大会には1チームのみ出場する。ようするに、選抜メンバーの一員になるためには、育成、強化、ブロックトレセン、選抜大会など幾度の競争を経て実現するのである。当然、選抜でプレーする権利は、選手本人の努力とチャレンジでつかみ取ったものである。

また、全チームの選手に平等にチャンスを与えるべきである。なぜなら、切磋琢磨した環境が育成には必要であるからだ。したがって、各チームは、積極的に「育成トレーニング」に選手を派遣していただきたいと考えている。

(3) 試合について (システムの変更)

前哨戦である大田区選抜大会では、A チームは最下位であった (参加 8 チーム中 8 位)。つまり、結果が伴わなかったチームは自信を喪失していたのである。そうした状況の中、本大会の予選 1 試合目も 0-1 で惜敗したのである。

いよいよ負けられない状況に陥った。よって、予選第 2 試合目でシステムを変更した。1 トップから 2 トップに変更したのである。そして、メンバーも大幅に入れ替えたのである。なぜなら、敗戦によりチームは攻守のバランスを崩し、全ての面で機能していなかったからである。

北田 (大田クラブ) は、「2 トップへのシステム変更は前線でのボールの収まりに繋がった。したがって、システム変更以降は主導権を持ってゲームをコントロールできていた」としている。つまり、2 戦目以降は攻守が安定したのである。

また、木村 (山王キッカーズ) は、「決勝戦も全選手が出場した。そして、後半の勝負所で安定していたセンターバックを交代させたのは勇気のいるものである。変わって出場した選手には大きなプレッシャーが掛かった。しかし、貴重な経験を積めたのでないか」としている。そのことから、システム変更や選手起用を柔軟に行っていたのである。



佐藤 (ジュニアチャンプ) は、「全ての選手を信頼してシステムを変更する。そして、新たな選手を起用することが重要である」としている。ようするに、システムや選手起用において、固定化したマネジメントは全体を停滞させるのではないかと考えられる。つまり、我々大人の固定概念や固定評価は選手のパフォーマンス低下の要因となっているのではないかと考えられる。

我々は勝利だけでなく、選手の育成を目的としている。そのためには、選手を信頼する。そして、チームとして選手個人に役割を与えるのである。選手は必要とされるがゆえに、十二分にパフォーマンスを発揮するのである。そうした意味で、大田区の選手選考における基本理念である「全員を戦力として選考する。そして、必ず試合で起用する」は子どもたちの成長に繋がるものだとと言える。

試合結果			
予選リーグ	大田区選抜	0 - 1	青葉区選抜
予選リーグ	大田区選抜	2 - 0	瀬谷区選抜
決勝トーナメント 1 回戦	大田区選抜	6 - 0	246 選抜
決勝トーナメント 2 回戦	大田区選抜	1 - 0	品川区選抜
準々決勝	大田区選抜	1 - 0	幸区選抜
準決勝	大田区選抜	6 - 0	船橋トレセン
決勝戦	大田区選抜	1 - 0	新座片山



(4) 試合について (自チームのゲーム分析)

システムを変更した 2 戦目以降は強固な守備を中心に、安定した戦いであった。全 7 試合で 17 得点 1 失点は、大変素晴らしい結果である。しかし、決勝トーナメント 1 回戦で自チームのゲーム分析を行った。そうすると、後半 13 分まで (後半 14 分以降は選手を大幅に入れ替えたため分析評価の対象外とした) に 70 回ボールロストをしたのだ。1 分平均で 2 回以上ボールを失っているのである。他の試合と比較分析していないため推測になるが、ボールを失わないという技術と判断力の獲得は必要と考えられる。

そのためには、U12 年代でも試合の状況や場面を考慮してプレーする必要があるのだ。つまり、サッカーの 3 つ場面であるアタッキングサード、ミドルサード、そしてディフェンディングサードによって、プレーの判断基準は変わるものである。

選抜はチームの準備期間が短い。つまり、選考後はすぐに大会本番という状況である。したがって、チーム戦術を浸透させるのは難しい。しかしながら、強固な相手に対してはどのようなチーム戦術を用いるかが重要である。そのためには、毎月の育成・強化トレーニングにおいて、個人の技術と判断力の向上を積み上げていくべきである。





(5) 選手の主体性について

選手は、試合を勝ち進むにつれて自信を得ていった。森山（開桜FC）は、「この選抜活動を通して選手が成長する機会に繋がりたい」としている。また「勇気、挑戦、仲間を大切にする。そのために、選手1人1人と対話するよう心がけた」としている。つまり、主役は選手なのである。我々大人はあくまでもサポートをする役割なのである。したがって、決勝戦は選手の勝ちたいという気持ちが、チーム全体の積極的なプレーに繋がっていった。

こうした自主性を重んじた指導者と選手の関係は、選手の有能感を引き出すのである。さらに、勝ちたいという強い気持は内発的動機

付けである自己決定理論を構成するのである。そして、自分たちでチャレンジして獲得した成功体験は、一生の思い出として選手の記憶に長く残っていくであろう。

(6) チームリーダーの存在

選手は、常に明るく元気であった。そうした明るさが一番の勝因であったのではないかと印象的であったのは2名のGKの存在である。2名は常にチームの先頭に立ち、リーダーシップを発揮していた。表彰式ではGKの2名がチームの最前列に並んでいたのはその象徴である。2名の明るい性格はチームのムードメーカーも務めていた。

しかしながら、GKは1名しか試合に出場できない。控えに回った際に1名は悔しさを態度に示した。チームへの文句を示したのではない。試合に出場できない悔しさからの行動であろう。試合のメンバーは監督が決める。そして、選手の役割は与えられた状況でパフォーマンスを発揮するのである。しかし、絶対に自分が出場する。さらに、チームの勝利のために絶対にゴールを守るという強い決意を持って挑んでいるからこそ、悔しさを示したのである。



さらに、もう1名のGKは決勝の後、自分から主審や副審に挨拶を行っていた。勝利という結果だけでなく、試合に関わった主審や相手チームにリスペクトの態度を示していたのである。そうした行動は高い評価に値する。そして、優勝という結果を手繰り寄せた一つの要因である。

森山は、「選手が中学、高校、大学、さらには社会人となった際に、仲間と協力して自らのベストを尽くす。そうした取り組みができるよう育成、指導を心がけた」としている。そういった意味で、2名のGKの強い気持ちとリスペクト精神は、今後の成長に必ず繋がるものだと信じている。

(7) 大田区小学校駅伝大会との日程重複

大会3日目の12月18日（土）は、大田区の駅伝大会と日程が重複した。よって、選抜19名の内11名（午前7名、午後3名、他1名が欠席した）が欠席となった。大田区サッカー協会の方針は、駅伝大会への出場が優先である。なぜなら、駅伝大会は大田区の学校行事である。そして、10名は所属小学校の代表選手である。つまり、10名は駅伝大会に出場する責任があるのだ。したがって、新たに4名の追加選手を招集した。こうした状況により、4名が選抜大会でプレーする機会を得られたのは大変良かったのではないかと。

駅伝大会は午前と午後の部があった。そのため、保護者には車による送迎協力、さらには所属小学校や先生への相談などを様々な調整を行っていただいた。つまり、駅伝大会の出場に支障がないよう、少しの時間でも大会に出場できるよう各方面で最大限の調整をしていただいたのである。そして、新たに加わった4名も試合で大活躍したのである。こうした多くの皆様のご協力により、チームは窮地を乗り越えトーナメントを勝ち進むことが出来たのである。

また、本件において大前会長（大田区サッカー協会）より「選手に選抜大会より駅伝大会を優先させたことは、大田区サッカー協会の理念に叶う適正なる決断で称賛に値する」とのコメントを現場スタッフにいただいた。大前会長よりこうしたコメントをいただいたことで、現場スタッフの士気は一気に高まったのである。

(8) フェアプレーについて

長田（大森キッカーズ）は、不要なファウルをしない重要性を指摘している。不要なプレーは正しいテクニックの習得を阻害する。つまり、ファウルで事なきを得て、大切な学びを失っているのである。したがって、今後も自らが成長するためには不要なファウルをしない。そのためには、オフ・ザ・ボールにおける正しい守備の原則やチャレンジの優先順位を身に付けることが大切である。また、長田は「勝つことだけが目的ではない。我々技術委員会の指導が、選手が成長する一助になれば嬉しい限りである」としている。



決勝戦では大田区は2名がイエローカードを受けた。背後からの危険なプレーである。そして、決勝戦の後に2名はスタッフと共に大会本部より注意を受けた。審判部の方よりフェアプレーの指導を受けたのである。2名の成長を願い、選手にご指導いただいた大会本部にこの場を借りして感謝を申し上げる。



(9) ご挨拶

岩井（少年部長）は、「東京ベイスーパーカップの優勝は悲願であった。優勝は、技術委員会の育成トレーニングと強化トレーニングの取り組みの成果である。同時に、優勝は各チームの6年間の指導の賜物である。選抜は、各チームの選手の力を借りたにすぎない」としている。

この場をお借りして、各チーム代表者、コーチの皆様のご理解とご協力に感謝致します。そして、大切な選手を快く派遣いただいた各チームにお礼致します。

また、選抜には多くのスタッフ関わった。コーチングスタッフは当然ながら、技術委員会のスタッフもサポート、分析作業を行った。また、審判委員会のサポートも大会の運営や出場には不可欠である。そして、忘れてならないのは、これまでの大田区サッカー協会少年部の活動でご尽力いただいた先輩方の存在である。長い歴史の中で、多くの方々の貢献により、現在の技術活動を行えているのである。



(10) 最後に（選手と保護者の皆様へ）

今回の初優勝はやはり選手のチャレンジの成果であろう。常に笑顔で楽しく、一生懸命に取り組んだからこそなし得た優勝であると言える。また、これまで懸命に育ててくれた保護者のご理解があったからこそ、今回の選抜チームが編成できたのである。誰か一人でも欠けていたら、夏冬連覇という偉業は達成できなかったのである。

選手はチャレンジして優勝を成し遂げた。そういった意味で、今回の選手がこれからどのように活躍し、成長していくかをスタッフ一同心より楽しみにしている。優勝、おめでとうございます。

そして、大田区はこれからも子どもたちの将来を見据えた技術活動を継続していくのである。そのためには、子どもの育成を推進していくのである。我々の方法でより良い地域サッカー環境を構築していくことが、さらなる大田区の発展に繋がっていくのである。

報告者
大田区サッカー協会少年部
技術委員長 廣庭 秀高